

性頗る放蕩にして法度に拘らず

——『懷風藻』 大津皇子伝前半部における人物造形——

土佐 朋子

- 一、『懷風藻』 大津皇子伝と『日本書紀』 大津皇子伝
- 二、『懷風藻』 大津皇子伝における『日本書紀』との相違
- 三、天武天皇の「長子」という解釈
- 四、武勇の皇子像の創出
- 五、「放蕩」の皇子像の創出
- 六、詩歌に基づく人物造形
- 七、大津を「註誤」する行心の登場

『懷風藻』 大津皇子伝前半部では、大津皇子は「長子」だとする記述者の歴史認識が示され、武勇と放蕩の大津像が造形される。これは、知的で礼儀正しい大津像が造形され、大津が周囲を「註誤」して謀反を起こしたとする『日本書紀』の記述に対して、「註誤」されて謀反を起こした大津への転換を図る懷風藻大津伝の記述者が、大津作とされる詩歌から新たに造形し直した大津像である。

一、『懷風藻』 大津皇子伝と『日本書紀』 大津皇子伝

大津皇子は、六八六年、天武天皇崩御の直後に謀反を起こし、死を賜ったとされる皇子である。その人物像を記す資料としては、『日本書紀』朱鳥元年十月三日薨伝に付載される大津皇子伝と、『懷風藻』大津皇子伝がある。従来、この二つの資料は、相互に補完し合うものとして複合的に用いられ、大津皇子の「実像」が「復元」されてきた。たとえば、「状貌魁梧」で「幼年にして学を好み、博覧にして能く文を属る。壮に及びて武を愛み、多力にして能く剣を撃つ」とする懷風藻の伝と、「天命開別天皇の為に愛まれ」て「長に及びて弁しく才学有しまし、尤も文筆を愛みたまふ」という書紀の伝とが組み合わされて、「容貌たたくましく、壮年に及んで武を愛したが、ことに幼時より文才に秀で、天智天皇に寵愛された」（『国史大辞典』笹山晴生氏執筆）、「幼少のころから文武に長じ、天智天皇の寵愛を受けた」（『世界大百科事典』平田耿二氏執筆）というように、天智に寵愛された、文武両道を行くたくましく皇子という大津像が、「実像」として「復元」されている。実は天智の寵愛は書紀にしかない記述であるし、容貌のたくましさは懷風藻だけが述べることである。文と武に関する記

述も懷風藻と書紀とは異なっている。それにも拘らず、それらの相違は相互に補完可能な「異なる情報の断片」ゆえに生じる相違として把握され、二つの資料はパズルのピースのように一元的に扱われている。

しかし、成立時期も編述者も異なる二つの資料を、その書物としての性格を無視して、一元的に扱うことは問題である。書かれた言葉には、それを書いた者の歴史認識が表れる。それは、書いた者自身の生きた時代や、その人物や出来事との関わり方が影響する。大津と同時代に生き、謀反事件を半ば当事者の一人として体験した者と、大津よりも後世に生き、謀反事件を伝聞で知り得た者とは、大津皇子に対する見方も当然異なってくるはずである。資料間の記述の相違は、互いに補完可能な「異なる情報の断片」ではなく、それぞれの記述者ごとの「歴史認識」の相違として捉えられるべきだろう。

拙稿^②において、書紀の大津伝が一貫して知的な皇子として大津皇子を造形し、専らその知性の高さに対する賛美を意図していることを論じた。従来、大津皇子の「実像」として「復元」されてきた「文武両道」の「武」の要素は、書紀には見られない。書紀は「文」の素養の高さには注目しているが、「武」の要素には関心を寄せていない。「文」すなわち「知性」の高さこそが、書紀大津伝の記述者自身

の理想であつたからだろう。書紀大津伝の記述者は、大津皇子に自分達の理想としての知識人像を見て、その知性の高さを賛美することを意図した。大津と同世代の書紀大津伝の記述者においては、大津の謀反は、当代きつての知識人によって起こされ、その知識人が命を落とした事件として認識されていたのである。

「武」は、懷風藻の大津伝で新たに大津に付与された要素である。さらに懷風藻大津伝は、「放蕩」で社会の常識などに束縛されないという大津像をも創出している。これもまた、武勇に秀でた大津像とともに、書紀にはなかった懷風藻独自の造形である。そしてその大津の性格が、行心という「奸豎」を近づかせ、謀反という「不軌」を図ることになったという、書紀にはない独自の見解を示す。従来、このような懷風藻独自の記述は、書紀が伝えない「真実の断片」として扱われる傾向にあった。しかし、書紀でさえ謀反事件から三十四年を経ているというのに、事件から六十五年も経って作られた懷風藻が、書紀が書き漏らした「真実」をどこから拾い集め、「史実」として記録したというのは、かなり不自然であろう。

書紀は、九月二十四日の発覚、十月二日の逮捕、三日の賜死、二十九日の持統天皇詔という、謀反事件の経過を記録する中で、大津は周囲を「誣誤」した首謀者だとする認

識を示す。事件後、加担者三十人余りは皆、大津に「誣誤」された者と見なされ、赦免されるが、礪杵道作と行心には処分が下る。

それに対して、懷風藻は大津伝において、大津は「行心」に「誣誤」されて謀反を起こしたとする。さらに河島皇子伝では、莫逆の友である河島皇子による密告という「発覚」のきっかけを設定する。懷風藻の行心による誣誤と河島の密告は、書紀の記述にはなかった新たな要素である。

しかし、懷風藻は書紀と全くかけ離れ、無関係な記述をしているわけでもない。多くの人が寄つてきたという造形は、書紀の三十人余りが連座したという点を連想させる。また、懷風藻は行心のそのかしという謀反の核心に触れる重要な場面を、「誣誤」という語で説明するが、これは書紀でも用いられている語である。懷風藻では行心が大津を「誣誤」し、書紀では大津が加担者を「誣誤」したとされる。懷風藻は書紀と同じ「誣誤」という語を用いて、「誣誤」した大津から「誣誤」された大津へと立場を逆転させている。懷風藻大津伝の記述者は、書紀が「誣誤」という語を用いていることを知っていて、あえて同じ語を用いているのではないかと考えたくなる。さらに、懷風藻での「行心」は大津謀反のきっかけを作った重要人物である。

書紀でも、持統詔に採り上げられる特別な存在である。謀反に加担しながら「朕、加罪するに忍び」ないという持統の憐れみを被り、しかしほぼ全ての加担者が赦免される中で寺の配置換えという処分を受ける。なにか処分を降さねばならない事情があつたのだろうと想像はされるが、書紀はそれ以上説明しない。読者には行心は何をしたのかという疑問が残る。懷風藻における「行心」のそののかしは、この疑問に対する懷風藻大津伝記述者による解釈なのではないかと思いたくなる。河島による密告も同じである。書紀は朱鳥元年十月二日、天武殯宮における大津の謀反の発覚を唐突に伝え、それ以上説明しない。どのように発覚したのかという疑問が読者には残る。その疑問に対する懷風藻の解釈が、親友河島による密告だったのではないだろうか。

懷風藻は、書紀にない大津像と謀反事件を記すが、それは書紀から乖離した全くの別物ではない。書紀と重なりあう部分を持ち、しかし書紀が沈黙する点について独自の解釈を示し、それにあわせた新たな大津皇子像が造形されている。懷風藻の伝の記述者は、書紀の記述を読んでいるのではないだろうか。その上で、書紀の抱える謎を解きほぐし、自らの歴史認識に基づく新たな解釈を示そうとしているのではないかと考えられる。夙に矢作武氏は、懷風藻が、

大津の漢詩を資料として『世説新語』的な「虚構」を創出し、書紀という「虚構」の正史を「否定」しようとしているのではないかと述べ、懷風藻が書紀に対抗する記述意識を有していることを論じている。

本稿では、懷風藻大津伝と書紀大津伝を弁別し、その差異を大津謀反事件に対する解釈、すなわち歴史認識の差異と捉え、書紀と異なる懷風藻独自の記述を改めて考察することによって、懷風藻における歴史認識と編述意図を明らかにしたい。紙幅の関係により、本稿では、大津伝の前半部に焦点を当て、書紀とは異なる懷風藻の大津造形とその意図を考察することとし、行心登場以降の後半部については次稿⁴にて考察することとする。

二、『懷風藻』大津皇子伝における『日本書紀』との相違

懷風藻の大津伝は、次の通りである。

A 皇子は、淨御原帝の長子なり。B 状貌魁梧、器宇峻遠。幼年にして学を好み、博覧にして能く文を属る。壮に及びて武を愛み、多力にして能く剣を撃つ。C 性、頗る放蕩にして、法度に拘らず、節を降して士を礼ぶ。是れに由りて、人多く附託す。

D 時に新羅僧行心有り。天文卜筮を解す。皇子に詔げて曰く、「太子の骨法、是れ人臣の相にあらず。此れを以て久しく下位に在らば、恐るらくは身を全うせざらむ」と。因りて逆謀を進む。此の註誤に迷ひ、遂に不軌を図る。嗚呼惜しきかも。彼の良才を蘊みて、忠孝を以て身を保たず、此の奸豎に近づきて、卒に戮辱を以て自ら終ふ。E 古人の交遊を慎みし意、因りて深きかも。時に年二十四。

対する書紀の大津伝は、次の通りである。

皇子大津は、天淳中原瀛真人天皇の第三子なり。容止牆岸、音辞俊朗なり。天命開別天皇の為に愛まれたまふ。長に及びて弁しく才学有しまし、尤も文筆を愛みたまふ。詩賦の興り、大津より始れり。

懷風藻大津伝が書紀と異なるのは、主に次の五点にまとめられる。

A、大津を天武天皇の長子だとする点。

↓書紀は、大津は天武の第三子としている。

B、たくましい身体で、武にも秀でていたとする点。

↓書紀は、外見や武勇については述べていない。⁵⁾ 文

筆を好み、本格的に漢詩文を興隆させた皇子だとする。

C、「放蕩」な性格で、礼儀やしきたりには拘らなかったために、多くの人が寄つてきたとする点。D Eではこれが謀反を引き起こす要因の一つとされる。

↓書紀は、むしろ逆で、礼儀を重んじ、その立ち居振る舞いに、周囲には推し測りがたいほどの威儀の高さが表れる皇子だとする。⁶⁾

D、新羅僧行心を、皇子に寄つてきて、観相によつて大津を「註誤」し、謀反をそそのかした「奸豎」だとする点。

↓書紀では、持統詔において、連座者三十人余りは大津に「註誤」された者たちだとする。新羅僧行心も大津に「註誤」された一人であるはずだが、「註誤」された連座者のほぼ全てが赦免される中、「皇子大津の謀反に与せれども、朕、加法するに忍びず」とされながらも、飛驒国に徙されており、無条件に赦免されてはいない。

E、人間関係に慎みがなかったことが、謀反を引き起こした要因の一つだと総括する点。

↓書紀では、大津は礼儀正しい皇子として描かれており、人間関係に慎みがなかったという要素がな

い。

これらにはそれぞれ書紀と相違する内容が確認され、懷風藻独自の解釈と言ってよい。この伝は、AとCにおける「長子」「武勇」「放蕩」という大津の出自や性格が、D以降の行心による「註誤」という謀反事件の契機へと、有機的に結びついていく構成になっている。本稿では、AとCの考察を通して、懷風藻大津伝における大津皇子の造形とその意図とを明らかにする。

三、天武天皇の「長子」という解釈

大津は、書紀大津伝では天武の「第三子」とされるのに対して、懷風藻大津伝では天武の「長子」だとされる。書紀の「第三子」という認定は、皇子本人の生れた順番に基づいている。書紀において、天武所生の皇子のうち、壬申の乱での活躍が記される高市皇子が最も早い生誕と考えられ、持統称制前紀に「天命開別天皇の元年に、草壁皇子尊を大津宮に生みたまふ」とされる草壁皇子がそれに次ぐ。大津は朱鳥元年（六八六）に「二十四歳」で「賜死」したと記されることから逆算して、天智二年（六六三）の生れとなるため、草壁に次いで「第三子」ということになる。出生順の早い草壁が大津よりも上だとするのが書紀の歴史

認識である。書紀の歴史認識と対立してまで、懷風藻が大津を「長子」だとする背景には何があるのだろうか。

都倉義孝氏⁹⁾は、「悲劇の主人公として理想化せずにはいられなかった後代の人々の願望」によって、「長子にもかかわらず帝位にもつせず、持統の策謀の犠牲になったことで、その悲劇性が強調されたもの」だと論じている。しかし、人の死に関する語りは常に「悲劇性」を帯びるものである。だから、「悲劇性の強調」と言うからには、後世のどのような人々が、大津を「長子」とすることとどのような悲劇性を強調しようとしたのか、その必然性について具体的に論じる必要があるが、それはなされていない。また、懷風藻の大津伝は、謀反という災いを引き起こしたのは、大津自身の交遊に対する慎重さの欠如だという認識を示しており、悲劇性を強調しようとする意図は希薄である。

大津を「長子」とする序列は、書記とは異なる懷風藻独自の基準によって示された認識だったのではないだろうか。書紀で天武の「第三子」とされるのは大津だが、『続日本紀』では舍人皇子である。書紀は皇子本人の誕生順を基準としたのに対して、続紀は母親の身分という要素を考慮した基準を設定したために生じた違いである。このことは、皇子の序列が、誰から見ても同じになる絶対的なものではなく、見方を変えれば変わらうる相対的なものであったこ

とを意味している。つまり資料に示された皇子の序列に表れているのは、その資料における認識である。懷風藻の「長子」という記述も、懷風藻における序列認識を表わすものと考えられる。

では、懷風藻はどのような認識によつて、大津を「長子」としたのだろうか。

書紀は、皇子本人の誕生順で序列化した。持統天皇が「天命開別天皇元年」に生んだと記される草壁は、朱鳥元年に二四歳で没したと記される大津よりも一歳年長になる。だから書紀は草壁の方を格上に位置づける。書紀は、二皇子の母親についても出生順で序列化を図っている。大津の母である大田皇女と草壁の母持統天皇（鸕野讃良皇女）はともに天智と遠智娘の間に生れた実の姉妹とされる。二人の出生については、持統が後代の資料『本朝皇胤紹運録』に孝徳元年（六四五）出生と推定される以外は不明である。書紀はこの二人について、三度にわたつてその序列を明確に示している。すなわち、天智七年二月条に「其の一を大田皇女と曰し、其の二を鸕野皇女と曰す」、天武二年二月条に「正妃を立てて皇后とす。后、草壁皇子を生みたまふ。先に皇后の姉大田皇女を納れて妃とし、大来皇女と大津皇子とを生む」、持統称制前紀に「天命開別天皇の第二女」と述べ、大田皇女が「姉」で「第一女」、鸕野讃良皇女が

「妹」で「第二女」と序列化する認識を徹底して示す。

あくまでも本人自身の出生順を重視する書紀は、母親は母親自身の出生順で序列化し、皇子については皇子自身の出生順のみで序列化する。母親は大田の方が鸕野讃良より格上だが、皇子は出生順で草壁の方が大津よりも上だとする。しかし、これはあくまでも書紀の基準に基づいた書紀の主張に過ぎない。もし、史書が三回にわたつて主張する母親の出生順（序列）が皇子の序列においても加味されれば、姉であり、「第一女」として先に天武後宮に入った大田皇女所生の大津の方が、妹で「第二女」として姉に遅れて後宮入りした鸕野讃良皇女所生の草壁よりも、格上に序列される可能性は大きい。

大田皇女は、天智紀六年二月二十七日条の「是の日に、皇孫大田皇女を以ちて、陵の前の墓に葬りまつる」に基づけば、大津出産後、天智六年までの間に没したことになる。その後、妹の鸕野讃良皇女が皇后となり、草壁皇子が皇位継承の筆頭とされた。が、もし大田皇女が生きていたら、「第一女」で先に天武の妃となった大田皇女が皇后になるのが自然であろう。そうすると、草壁よりも大津の方に皇位継承の正統性がある、そのように認識されてもおかしくはない。懷風藻大津伝の「長子」には、大田皇女所生の大津こそが正統な皇位継承者だとする認識が示されているの

ではないかと考えられる。¹⁰⁾

大津が「長子」だと考える懷風藻大津伝の記述者にとつて、大津が周囲を「誑誤」して謀反を起こしたとする書紀の記述は納得し難いものだっただろう。謀反など起こさずとも皇位を継承する立場にあるはずだからである。「長子」の大津が謀反を起こすには、何か不自然な力が働いたはずである、そう考えた懷風藻大津伝の記述者は、「誑誤する大津」から「誑誤される大津」への転換を図ったのではないだろうか。懷風藻大津伝BCでは、他人から「誑誤され」かねない危うさを抱えた両義的な大津皇子が造形されていく。

四、武勇の皇子像の創出

懷風藻大津伝はB冒頭において「状貌魁梧」と言う。

「状貌」は、矢作武氏に『世説新語』に「多く使われる語」とされるが、管見では『史記』高祖本紀に「呂公は人を相を好み、高祖の状貌を見て…」、田敬仲完世家に「太史敦の女法章の状貌を奇とし、以て恒人に非ずと為す」など、史書を中心として漢籍に一般的に用いられ、体格、姿かたちを指す。「魁梧」も、『魏志』何夔伝で曾祖父何熙に関して裴松之が挙げる華嶠『漢書』に「…小節に拘らず、身長八尺五寸、体貌魁梧、善く容儀を為す」、後漢

書臧洪伝に「体貌魁梧、異姿有り」、趙壹伝に「体貌魁梧、身長九尺、美須豪眉、之を望めば甚だ偉なり」(『初学記』「長人」にも収録)など漢籍によく見られ、人目を引くほどの体格の大きさを表わしている。この二つを連続させた「状貌魁梧」は、大津がひととき大きくたくましい体つきをしていたことを表わしている。

このような大津の外見に関する記述は、書紀にはない懷風藻独自の視点である。従来は、書紀の「容止牆岸」は、この「状貌魁梧」と同様に容貌の大きさを表わしていると解されてきたが、「容止牆岸」は大津の立ち居振る舞いに表れた知性の計り知れぬ高さを述べたものであり、体格の良さを述べる懷風藻の「状貌魁梧」とは全く異なる。¹¹⁾

懷風藻のこの「状貌魁梧」という外見の特筆は、Dにおける行心の観相に深く関わっていると思われる。先にあげた『史記』高祖本紀では高祖の「状貌」を見た呂公によつて、高祖が天命を受けた人物であることが明らかにされる。『論衡』骨相篇に「人、命を天より稟くれば、則ち表候の体に見はる有り…表候とは骨法の謂なり」とされるように、天命が骨法に表される。観相はその骨法という外見に基づいて行われる。Dで行心の観相で受命の皇子であることが明らかにされる大津が「状貌魁梧」、すなわち人並み外れた体格の持ち主であるとされることは必然で

あったと言える。懷風藻は大友皇子伝でも大友皇子に対する唐使劉德高による観相を描くにあたり、大友が「魁岸奇偉」であることを特記している。大友、大津いずれも天命を受けた皇子だと考える懷風藻の認識の表れと考えられる。

懷風藻大津伝は、幼少より学問に優れたことを述べた後、「壮に及びて武を愛み、多力にして能く劍を撃つ」とする。この武勇に優れた大津像は、書紀にはない懷風藻独自の造形である。体格の良さは、武力の強さを自然にイメージさせる。綏靖紀でも、「壮に及びて容貌魁偉、武芸人に過ぎず、志尚沈毅にまします」という「状貌魁梧」の類句が見られるが、ここでも体格の良さが「武」に秀でていることと結びついた人物造形となっている。

漢籍においても、体格の大きさと武勇とが組み合わさった造形は見られる。「峙、状貌魁梧、辞令を善くす」（『周書』庫狄峙伝）とされる庫狄峙は、「騎射を善くし、謀略有り」とされ、辺境の反乱制圧に拔擢されており、「武」に優れた人物として造形されている。また、「魁梧」の例として挙げた何夔の曾祖父何熙も、裴松之注の華嶠『漢書』で辺境反乱の制圧で武功をあげる士として記されている。さらに、『史記』留侯世家伝賛「余以為らく、其の人の計は魁梧奇偉、状貌は婦人好女のごとし」、あるいは『漢書』張良伝賛「張良の智勇を聞けば、以為らく其貌魁

梧奇偉ならん」というように、その軍師としての有能さが人並み外れた大きな体を持つ張良を連想させている。体格の大きさは、武勇における優秀さを連想させる条件だと言える。

ちなみに、『周書』には「状貌魁梧、神彩嚴肅」（長孫儉伝）という例もある。長孫儉は、常に嚴かで、「性、交に妄りならず、其の同志に非ざれば、貴遊造門と雖も、亦た与に相ひ見ず」というように、人間関係にも慎重であったとされており、自由奔放に交友関係を持ったとする懷風藻大津伝の大津像とは逆の人物造形となっている点が注目される。

懷風藻大津伝において、大津は「状貌魁梧」とされることにより、「壮に及びて武を愛み、多力にして能く劍を撃つ」という武勇の皇子としての造形が、自然な形でなされることになる。この造形は、一貫して知的な皇子として大津を造形する書紀とは対照的である。懷風藻大津伝においては、知性だけでなく、武勇も兼ね備えた大柄な皇子という造形によって、大津はともすれば武力の行使に向かうかもしれない可能性をはらむことになる。知性高き皇子で一貫させる書紀に対して、懷風藻大津伝では、安定と不安定、成功と破滅という二つの異なる可能性をはらんだ両義的な皇子として造形されていると言える。

五、「放蕩」の皇子像の創出

Bの「状貌魁梧」に続く「器宇峻遠」は、「南康兄、器宇冲貴、風神英挺」（『芸文類聚』友悌、「風格峻遠、器宇深邵」（『梁書』蕭穎達伝）など、漢籍の人物造形にしばしば用いられる語を組み合わせて、精神や度量の広さや深さを表わしている。これは、Cの世間の常識や制度に束縛されない精神の持ち主であったという人物造形と呼応しているように思われる。

懷風藻大津伝は、Cにおいて大津が「頗る放蕩」な性格であり、「法度に拘ら」ない人物だと述べる。この形容については、林古溪『懷風藻新註』が「わかままにしてしまりのなきこと。檢束なし」と注するように、大津に対する否定的な評語として解されることが多く、杉本行夫『懷風藻』は、「器宇峻遠」とは「調和」しないとも指摘している。しかし矢作氏は、『世説新語』劉孝標注の「伶：肆意放蕩にして、宇宙を以て狭しと為す」（文学篇六九話注所引「名士伝」）、「阮籍：宏達不羈にして、礼俗に拘らず」（德行篇一五話注所引『魏氏春秋』）、「澄、放蕩にして拘らず、時に之を達と謂ふ」（簡傲篇六話注所引『鄧粲晋紀』）を挙げ、「六朝特有の価値観を持った評語で、伝の『降節礼士』への文章の続き具合から考えても賛辞」であると肯

定的に捉えており、解釈が大きく異なっている。

漢籍において「放蕩」の語で造形される人物には、「指意放蕩」にして、頗る復た詼諧なり」（『漢書』東方朔伝）、「少くして機警にして、権数有り、任侠放蕩にして、行業を治めず」（『魏志』武帝紀・『芸文類聚』魏武帝）というように、規格外の言動で注目を集めた東方朔や曹操があげられる。また、矢作氏が「礼俗に拘ら」ない人物例としてあげた阮籍も、「個儻放蕩、己を行ふに欲専く、莊周を以て模則と為す」（『魏志』王粲伝）というように、その性格が「放蕩」の語で説明される。同じ竹林の七賢の劉伶は、『初学記』所引の梁祚『魏国統』にも「肆意放蕩、悠にして独り暢ぶ。自ら一時を得て、常に宇宙を以て狭しと為す」とされ、さらにその「放蕩」ぶりが、孫綽『道賢論』に「劉伶肆意放蕩にして、宇宙を以て小と為す」（『高僧伝』義解「竺法潜伝」）として、僧法潜の広大な精神を述べるのに引き合いに出されており、広く知られていたと見られる。

漢籍における「放蕩」は、この世界の秩序やそれを保持するための制度や常識といったものに束縛されない精神性を表わしている。『文選』羽獵賦の「大浦に儲与して、宇内に聊浪す」に対する李善注「聊浪は放蕩なり」からも、束縛されず無限の空間を駆け巡る自由自在さが「放蕩」と

いう概念で理解されていることが窺われる。そして、「放蕩」の精神は、「少くして才学を以て名を知らる、而して放蕩にして不羈なり」（『晋書』王長文伝）のように、知性の高さとともに兼ね備えられたり、「慷慨にして大志有り、姿貌魁偉、雄傑にして群れず、任侠放蕩にして、小節を修めず」（『晋書』憑素弗伝）のように、大きな体格とともに兼ね備えられたりもする。そのため、「放蕩」は俗世の知と力を超越し、儒教的価値観に對置し得る精神として理想化される一方で、俗世の仕組みを破壊し、秩序を乱す元凶として批判の対象ともなる。

嵇康は「与山巨源絶交書」（『文選』）で、自らが敬意を抱く阮籍が「礼法の士」の批判の対象となることを嘆く。これに対して李善は孫盛『晋陽秋』を引き、「何曾」が司馬昭の前で、「卿は性に任せて放蕩し、礼を取り教へを傷つく」と言い、阮籍の「放蕩」を礼教を損なうものとして非難した逸話を挙げている。その嵇康もまた「言論放蕩」（『晋書』嵇康伝）とされ、世の風俗を乱すものと断罪され、処刑される。『世説新語』任誕篇十三話注所引戴逵『竹林七賢論』に「是の時竹林諸賢の風高しと雖も、礼教峻なるを尚ぶ。元康中に迫びて、遂に放蕩の礼を越するに至る。楽広之を譏りて曰く、『名教中に自ずから楽地有り』と」とされ、行きすぎた「放蕩」が批判の対象となってい

る。「放蕩」が、儒教的な礼法を重んじ、皇帝を中心とした俗世の秩序を維持しようとする立場にとつては、除去されるべき害悪だと認識されたものであったことが窺われる。

また、阮籍が模範としたという莊子についても、『文選』班固「幽通賦」の「周賈は盪として貢憤し、死生と禍福とを齊しくす」に對する李善注に「曹大家曰く……莊周、賈誼は好知の才有りて、聖人を以て法と為さず、善惡を潰乱し、遂に放蕩の辞を為す」とされ、王坦之「廢莊論」では「荀卿莊子を称すらく、天に蔽はれて人を知らず。楊雄も亦た曰く、莊周は放蕩にして不法なり」（『晋書』王坦之伝）されるなど、礼法に従わないその言動が「放蕩」だとして批判されている。俗世の価値観に束縛されない莊子の「放蕩」は、脱俗反俗精神を掲げた阮籍ら竹林の七賢にとつては理想的なありようであっても、儒教的な価値観から見ると、知を翫び、聖人の法を守らず、秩序を乱す害悪として受け取られたのだろう。

「然れども放蕩少礼、人は亦た此れを以て譏る」（『蜀書』張嶷伝）という「放蕩」な張嶷を人々が批判したという逸話や、「性に任せて放蕩し、巫儀法を越し、意を得れば便ち行ひ、以て礙と為さず」（『高僧伝』義解「釈僧宗伝」という釈僧宗の行動が、礼節を重視する人たちの批判の対象になったという逸話も、「放蕩」が俗世の社会秩

序を乱すものとして批判的に受け取られた例である。「今官に当たたる者、事を理するを以て俗吏と為し、法を奉ずる苛刻と為し、礼を尽くすを諂諛と為し、従容を高妙と為し、放蕩を達士と為し、驕蹇を簡雅と為す、此れ三失なり」(『晋書』能遠伝)では、当今官吏の墮落ぶりが、「放蕩」と「達士」をはき違えたものとして批判されている。

さらに、「放蕩」は社会転覆を狙う精神と同質のものとされることもある。釈道恒「釈駁論」の「凡そ横しまを言ふ者は其の志を以て業尚きこと無く、散誕にして名莫し。或いは博奕放蕩して、家財を傾竭す…或いは肆暴姦虐して、不軌を動造す」(『弘明集』)には、「放蕩」を、「不軌」を囿る邪な精神と同じものと見なす考え方が確認される。

君主が臣下の上に立ち、富貴が貧賤に優先される、それが俗世の常識であり制度である。「放蕩」は、それらに束縛されず、むしろ逸脱しようとする精神である。だから、脱俗反俗精神を掲げる一部の知識人にとっては、「放蕩」は理想的な精神のありようとして受け取られる。しかし、俗世を支配する権力機構と、そこで生きるしかない大多數の官僚にとっては、そのような精神は秩序を乱す害悪ではない。俗世に生きる多くの人間にとっては、自らの安泰と存続を阻害する「危険な精神」として受け取られる。「放蕩」とは、俗世においてはそのような異端の精神であ

る。

梁簡文帝「誠当陽公大心書」の「立身は先づ須く謹重たるべし、文章は且つ須く放蕩たるべし」(『芸文類聚』鑑誠)は、「立身」と「文章」を対置させ、「立身」は「謹重」たれ、「文章」は「放蕩」たれと言う。¹³⁾「立身」が俗世の枠組みで達成されるものである以上、その達成のためには俗世の価値観や常識からの逸脱は許されない。しかし「文章」すなわち文学は「放蕩」であれと、簡文帝は言う。これは、文学は俗世のあらゆる束縛から解放され、異端の精神が貫かれるべきだという主張だろう。中国の伝統的文学観が「述志」を理念とするのに対して、簡文帝は「放蕩」を理念とする。この主張がすでに「放蕩」であるとも言える。

懷風藻大津伝は、大津を「放蕩」の皇子として造形する。これは、褒か貶かの二項対立的な人物評ではなく、俗世の常識に束縛されない異端の皇子としての造形と考えるべきであろう。この造形は、「長子」の持つ安定感を不安定なものへと変える。俗世の頂点に立つ可能性がある皇子が、俗世の常識や価値観を重視しないというのは一種の矛盾である。常識を越えた破格の指導者になる可能性と、自らの精神が自らの立場を危うくする可能性、この両極端な二つの可能性を帯びた両義的な皇子として大津は造形され

ている。

「放蕩」とされる大津が、「法度」に「拘ら」ない人物として造形されるのは、「放蕩」とされた阮籍が「礼俗に拘らず」（『世説新語』德行篇一五話注所引『魏氏春秋』）と評されたのと同じ発想である。「法度」は『書経』大禹謨「無虞を儆戒し、法度を失ふ罔れ」の孔安国伝に「法を乗り度を守り、恒有るを言ふ」とされ、太平なる俗世を永続させるために必要な制度や礼儀である。「法度に拘らず」とされる懐風藻の大津は、俗世の秩序を保つための礼儀や規範を気にしない皇子として造形されている。これは、「容止墻岸」つまり礼節を重んじ、威儀ある立ち居振る舞いを見せる書紀の大津とは対照的である。

懐風藻大津伝は、「法度に拘らず」に続いて、「節を降して士を礼ぶ」と述べる。「節」は、『礼記』楽記「好悪は節内に無し」の鄭玄注「節は法度なり」に、俗世の制度や礼儀を意味する「法度」と同義だという理解が示されている。『史記』貨殖列伝「節駟会」の張守節正義に「節は物の貴賤なり」ともされることから、「節」とは俗世の身分制度を意味すると考えられる。大津の場合は皇位継承者であるから、最も高い地位にある。「節を降す」とは、その己の最高の地位を顧みなかったことをいうのであろう。「法度」、すなわち俗世の制度や礼儀に束縛されない大津であるから、

「節」、すなわち俗世の身分制度が規定する己の高貴な身分など気かけず、あらゆる階級の人々と関わりを持った。懐風藻が造形する大津は、そのような俗世の規範から解放された「放蕩」の皇子である。

しかし、その「放蕩」な精神が、謀反へと向かわせる要因となっていく。懐風藻大津伝Cは「是に因りて人多く附託す」と言う。高貴な身分であるにもかかわらず、威張ることのない大津のもとには、様々な人が集まってきた。

『魏志』袁紹伝の「紹は姿貌威容有り、能く節を折りて士に下り、士多く之に附く」に造形される、名門の家柄でありながら低姿勢であったため、多くの士が集まってきたという袁紹像は、この大津像に似ている。袁紹は『後漢書』袁紹伝でも、「心を傾けて節を折」ったため、貴賤の別なく士が集まり、袁紹とともに俗世の常識に抗ったとされる。また、「節を折りて士に下り、英雋を招致すること百数を以てし、冠首に為さる」（『漢書』伍被伝）とされる淮南王や、「節を折りて士を待し、…之に帰す者は常に万餘人なり」（『魏書』司馬楚之伝）という司馬楚之、その他にも「節を折りて士に下り、門に客を留むること無し、時人は皆称へ之に附く」（『後漢書』皇甫嵩伝）、「身を卑しくして士を礼び、陰かに豪傑を結し、多く衆心を収む」（『隋書』王充伝）など、自らの身分の高さや立場の優位性を顧みず、

低姿勢で接する人物に多くの人士が集まるというのは類型の一つと見られる。多くの食客を抱えた孟嘗君も、『文選』呉質「答東阿王書」に「深く薛公の節を折るの礼を蒙る」とされ、威張ることなく人士を遇した人物として造形される。

多くの人士が集まったことで、その人物は成功を収める場合もあれば、破滅へ導かれる場合もある。人が多く寄り集まっただけでは、直ちに謀反を起こすことにはならない。しかし、冒頭では「長子」と位置づけられ、皇位を継承する立場であった大津は、「放蕩」という性格が付与されることによって、俗世から逸脱する危うさを帯びることになった。その大津のもとに、多様な人士が大勢集まったとなれば、なにやら不穏なものを感じさせる。これにより、成功にも破滅にも進み得る両義性を有する「放蕩の皇子」として造形された大津は、破滅へ向かう不安定な危うさをますます強く帯びることになる。

六、詩歌に基づく人物造形

懷風藻大津伝前半部において、体格が大きく武勇に優れ、俗世の秩序や常識に束縛されず、身分に関係なく人を遇した異端の皇子として大津は造形される。この大津像は懷風藻大津伝の勝手な妄想だけで書かれているとは言い切れない。

い。少なくとも伝の記述者は、相応の根拠があつてこのような推論を下しているはずである。懷風藻大津伝は、書紀以外の資料を動員することで、「論理的」にこの大津像を創出している。その資料の一つは、懷風藻自身が収録する大津の漢詩である。懷風藻には大津伝に続いて、四首の漢詩が大津作として収録されている。

体格がよく、武力に秀でた皇子という造形は、「遊獵詩」に基づいているだろう。この大津の「遊獵詩」は、懷風藻唯一の狩獵をテーマにした詩である。詩の大半を尽くして描かれる宴では、大津は狩獵を成功させた仲間とともに、肉を喰らい杯を傾け、その眼前には、昼間の狩獵で用いた弓が月光に耀き、旌が張り巡らされている。大勢の部下を従えて、盛大に行った狩獵の主催者であり成功者としての大津が浮かび上がってくる。狩獵は、自然を相手にした戦闘であり、武力がなければ勝利できない。狩獵の成功者は、武力の勝利者である。大津伝の武力に秀でたたくましい大津像は、この大津の「遊獵詩のイメージ」から創出された可能性が高い。

「放蕩」で、世の中の常識や制度に束縛されず、身分に関係なく人士を遇したという造形は、「春苑言宴詩」「遊獵詩」「述志詩」に基づいていると思われる。

「春苑言宴詩」は、場所は宮中だが、大津が中心となつ

て開かれた春の「言宴」を描いている。¹⁵ 詩題の「言宴」とは、親しい者同士がうちとけて楽しむ宴を意味する。その詩題の通り、詩には列席者を自分と対等で同列の仲間と認識し、宴という時空を仲間とともに、うちとけてくつろいで楽しむという意思が詠出される。

狩猟の詩賦では、狩猟は本来は皇帝が主催するのが通例であるが、大津の「遊獵詩」では大津自身が狩猟の主催者である。そして大津は、主催者の権力の誇示と君臣関係の身分秩序の確認が描かれるという狩猟の詩賦の通例を破り、もっぱら狩猟の参加者と対等な関係を築き、親密に時と場を共有することの喜びを詠み上げる。

これら大津の二首においては、俗世の頂点に立つ身分にありながら、その自らの権力や君臣の秩序に対する意識は見られない。身分秩序という俗世の「法度」に全く束縛されない大津の意識が読み取られる詩となっている。君主と臣下の秩序関係が明確にされるのが漢詩文の伝統であるが、大津詩はそのような伝統の範疇におさまっていない。まるで梁簡文帝の「文章は且つ須く放蕩なるべし」を実践しているかの如く、通例を破り、独自の理念を表現する詩を創作している。大津の漢詩に表われる精神も、その漢詩文創作のありようも、常識や伝統に束縛されていない。まさに「放蕩」の精神なのである。

「述志」と題された七言の二句には、天という紙に風という筆で鶴の雲を描き、山という機に霜が籽となり黄葉の錦を織り上げるといふ、壮大な自然の造化が表現される。¹⁶ その自然の営みに託される大津の「志」は、人間界の常識を遙かに超越していくものとして想起される。

懷風藻大津伝は、自らが所収するこれらの大津自身の漢詩に基づき、武に優れ、常識や身分秩序に束縛されない大津像を創出したのではないかと考えられる。そして、もう一つ、「放蕩」の大津を生み出す資料となったのは、『万葉集』巻二に収録される大津の一〇九番歌、「大船の津守が占に告らむとはまさしに知りて我が二人寝し」ではないだろうか。これは、草壁皇子の意中の女性である石川女郎との密会が、津守連通の占いで暴露された時に、大津が歌ったとされる歌である。¹⁷ 時の「皇太子」の立場にある草壁の想い人との密会がばれたとなれば、それ相應の代償を払わねばならないのが俗世の常識である。しかし、大津のこの歌は、暴露されることは初めから分かっている共寝をしたんだと、大胆にも開き直る。俗世の規範や常識など全く意に介していない。この歌からも「放蕩」の大津像が浮かび上がってくる。巻二相聞の原型は書紀とほぼ同じ頃に出来ていたと考えられる。¹⁸ 懷風藻大津伝の記述者が書紀を見ていたのだとすれば、万葉集巻二の原型を見ていてもおかし

くはない。

矢作氏は虚構に虚構で対抗したと見るが、おそらく懷風藻大津伝の記述者自身には、これが「虚構」だという自覚はほとんどなかったのではないかと想像される。大津自身が作ったとされる詩歌、すなわち大津自身の言葉に基づいているのであるから、「これこそが大津の真実の姿だ」と考えていてもおかしくはない。「大津自身が遺した言葉によって、大津の真実を復元する」というのが、懷風藻大津伝の記述者の意図だったのではないだろうか。懷風藻大津伝は、大津の詩歌という「一次資料」によって、「リアル」な大津像を造形し直したものであるとして記述されたのではないかと考えられる。もちろん、それは絶対唯一の「真実」ではない。「大津の詩歌」を資料として考察された、懷風藻大津伝記述者の歴史認識として受け取られるべきものである。

七、大津を「註誤」する行心の登場

懷風藻大津伝の後半部では、新羅僧行心が、観相によって大津を「註誤」し、謀反を起こす直接的なきっかけを作る。大津を「長子」だと認識する懷風藻大津伝は、皇位を継承するはずだった大津が謀反を起こすには、何か不自然な力が働いたはずだと考えたのだろう。その不自然な力と

して設定されたのが行心による「註誤」である。

行心は書紀と懷風藻に共通して登場する人物である。懷風藻では大津を「註誤」した「奸豎」である。書紀では大津に「註誤」された加担者の一人のはずであるが、加担者のほぼ全てが赦免される中、行心は寺の配置換えという処分を受けている。他の加担者と違う扱いを受けているのはなぜなのか、疑問が生じる場所である。懷風藻大津伝における行心の「註誤」という独自の設定は、「長子」大津がなぜ謀反を起こしたのか、行心はなぜ無条件に赦免されないのかという疑問をめぐる記述者の解釈の結果なのではないだろうか。大津は「註誤した」側ではなくて、「註誤された」側である、ゆえに「長子」であるにも拘らず謀反を起こした。大津を「註誤」したのは行心である、ゆえに行心には処分が降っているのである。そのように懷風藻大津伝の記述者は解釈したのではないかと考えられる。大津に謀反を起こさせる重要な場面において、わざわざ「註誤」という書紀と共通の語句を用いていることから、懷風藻大津伝の記述者が、書紀の記述を意識していることが窺われる。

本稿で考察してきた前半部A～Cにおいて、大津は成功と破滅の両方の可能性を感じさせる両義的な皇子として造形されている。この危うさを感じさせる大津像は、行心

の接近を許し、「註誤」されて破滅へと向かう後半部の大津像へと自然とつながる。次稿では、行心の「註誤」を描く懷風藻大津伝の意図について、「後人聯句」ともあわせて論じたい。

注

- (1) 従来、書紀の「容止墻岸」は懷風藻の「状貌魁梧」とほぼ同じように捉えられ、大津の容貌の逞しさを述べるもの理解されてきたが、拙稿『日本書紀』大津皇子伝の意図―『詩賦之興、自大津始也』の意味―(『日本文学研究ジャーナル』第十四号、二〇二〇年六月)において、書紀の「容止墻岸」が容貌の逞しさではなく、知的で礼儀正しい振る舞いの意であることを論じた。
- (2) 前掲注(1) 拙稿参照。
- (3) 矢作武「『懷風藻』所載の『伝』とその虚構性」(『国文学研究』第五十四集、一九七四年十月)。
- (4) 拙稿「太子の骨法これ人臣の相にあらず―『懷風藻』大津皇子伝後半部における行心の『註誤』―」(『文学部論集』百五号、二〇二一年三月刊行予定)。
- (5) 前掲注(1) 拙稿参照。
- (6) 前掲注(1) 拙稿参照。
- (7) 前掲注(1) 拙稿参照。
- (8) 書紀の皇子序列については、前掲注(1) 拙稿にて考証した。
- (9) 都倉義孝「大津皇子とその周辺―畏怖と哀惜と―」(『万葉

集講座第五卷』、有精堂、一九七三年)。

- (10) 横田健一氏は「『懷風藻』所載大友皇子伝考」(『白鳳天平の世界』創元社、一九七三年)において、大田皇女が「もし長生したら、おそらく大田皇女が皇后となられ、大津と草壁との運命は全くちがったものになった」可能性を指摘している。氏は、日本書紀の記述に照らし合わせて、懷風藻の「長子」という表現は、「誤つ」と確言し、「編者の感情的に大津を長子と認めた主観性」の表れではないかと論じている。記述者の歴史認識の表れだと考える本稿とは見解を異にしている。

- (11) 前掲注(1) 拙稿参照。

- (12) 前掲注(3) 参照。

- (13) 漢籍における「放蕩」については、林田愼之助「南朝放蕩文学論の美意識―簡文帝の文学観」(『東方学』第二十七輯、一九六四年二月)、鄧仕樑「釈『放蕩』―兼論六朝文風」(『中国文学報』第三十五冊、一九八三年十月)、大上正美「蕭統と蕭綱―『文選』と『玉台新詠』の編纂を支える文学認識」(『中国の文学論』汲古書院、一九八七年)、鎌田崇嗣「梁簡文帝における放蕩と美」(『筑波中国文化論叢』二十五号、二〇〇六年三月)などの先行研究がある。

- (14) 「遊佩詩」については、拙稿「大津皇子『遊佩』詩の論」(『古代中世文学論考』第二十二集、新典社、二〇〇八年十一月)で論じた。

- (15) 「春苑言宴詩」については、拙稿「大津皇子『春苑言宴』詩の論―大津皇子が目指した『言宴』」(『古代研究』第四十六号、二〇一三年二月)で論じた。

- (16) 拙稿「大津皇子詩歌における『錦』の発想―『山機霜杼

織葉錦」と「経もなく緯も定めずをとめらが織る黄葉——」
（『都立航空高専研究紀要』第四十一号、二〇〇四年十月）
において、「述志」と題された七言二句の斬新な美景表現が、
大津皇子によって生み出されたことを論じた。また、拙稿
「懷風藻」の「聯句」詩—大津皇子の意図と「後人」の意
図—（『古代研究』第四十一号、二〇〇八年二月）において、
その七言二句は、大津が中国皇帝を模倣して主催した「聯
句」の場で、大津自身が自然の壮大な造化を詠出した二句で
あり、「後人聯句」は、大津の死後に、それを大津の政治的
な志と解釈した「後人」によって付された二句であることを
論じた。

- (17) 津守連通は、和銅七年に従五位下となり、養老五年に陰陽
師となる。拙稿「石川女郎をめぐる二皇子の歌—大津皇子物
語の形成過程—」（『古代研究』第三十一号、一九九八年一
月）参照。

- (18) 『万葉集』卷二の編纂については、伊藤博『万葉集の構造
と成立上・下』（塙書房、一九七四年）など参照。

- (19) 前掲注（3）参照。

- (20) 前掲注（4）拙稿。

附記 本稿は、令和元年十二月二十一日開催の懷風藻研究会（代
表・高松寿夫）における発表をもとにしている。また、科
費基盤研究C「勅撰三集を中心とした日本古代漢詩文の文獻
学的研究」（一九K〇〇三四二代表）および「懷風藻の注解に
基づく上代日本の文筆活動の研究」（一九K〇〇三三二一分担）
の助成を受けて行った研究の成果の一部である。